

# 畜産研究所外部評価資料

## 1 研究所基本方針

### (1) 基本目標

当研究所は、「ぎふ農業・農村基本計画」（令和3～7年度）にある各種施策の実現を研究開発の面からサポートするため、「畜産研究所研究基本計画」（令和3～7年度）に基づく研究開発に積極的に取り組んでいる。

特に、県民に対する安全・安心・健康な畜産物の提供と県内畜産ブランド製品の振興を最重点課題として位置づけ、関係機関と緊密な連携をとり、①生産性向上のための家畜の育種改良の推進 ②畜産新技術の開発 ③畜産環境改善を中心とした研究開発により県内畜産業の振興を図る。

### (2) 基本方向

#### ① 家畜の育種改良の推進

- ・飛騨牛の育種改良・「飛騨牛」の全国ブランドとしての基盤の維持発展
- ・乳牛の改良・県内乳用牛の能力レベルアップと改良スピードアップ
- ・豚の改良・豚肉の高品質化をめざした育種改良
- ・鶏の育種改良・「奥美濃古地鶏」の高品質化・高付加価値化

#### ② 畜産新技術の開発

- ・DNA解析や受精卵移植技術を活用した新たな育種技術の開発
- ・センシング技術を活用した飼養管理の省力化に関する試験研究の推進
- ・生殖補助医療技術を活用した牛増産技術の開発

#### ③ 畜産施設に関する環境保全技術の開発

#### ④ 行政部局との連携強化

- ・「ぎふ農業・農村基本計画」「岐阜県家畜改良増殖計画」「岐阜県酪農・肉用牛生産近代化計画」など、各種計画達成のための支援の実施

#### ⑤ 外部資金の積極的活用

#### ⑥ 研究成果の積極的な発信と生産者・新規就農者などへの技術支援

#### ⑦ 優良種畜・精液及び受精卵などの供給

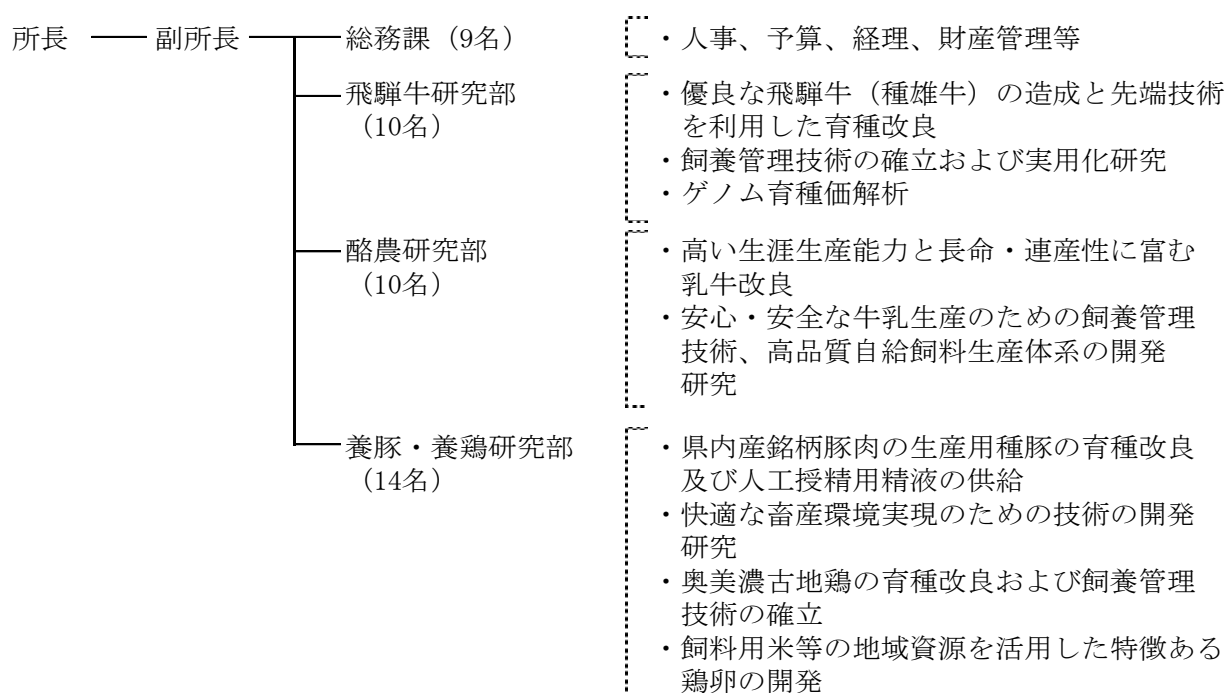
## 2 組織構成

### (1) 沿革

明治41年	岐阜県種畜場として郡上郡上保村大島（現：郡上市白鳥）に開場
大正9年	稲葉郡加納町（現：岐阜市加納）に種畜・種鶏・種卵の配布ならびに各種試験研究を実施する機関として岐阜県種畜分場を設置
昭和6年	大野郡清見村（現：高山市清見町）に岐阜県種畜場飛騨分場、山県郡高富町（現：山県市高富町）に岐阜県種畜場高富分場を設置
昭和12年	白鳥町の本場を廃止し、岐阜県種畜場飛騨分場を本場に整備
昭和32年	鶏関係施設を岐阜市鷺山に移転、岐阜県種畜場高富分場から岐阜県種鶏場に改称
昭和38年	美濃加茂市前平町に岐阜県畜産センターを設置
昭和40年	岐阜県種鶏場を関市迫間へ移転
昭和42年	岐阜県畜産センターから岐阜県畜産試験場に改称
昭和48年	恵那郡山岡町に岐阜県畜産試験場酪農試験地科を設置
昭和57年	岐阜県畜産試験場酪農試験地科から岐阜県畜産試験場酪農部へ改称
昭和61年	岐阜県種畜場から岐阜県肉用牛試験場に、岐阜県種鶏場から岐阜県養鶏試験場に改称

平成 8 年	科学技術振興センターが設立され、畜産 3 試験場は農政部から総務部所管へ
平成 12 年	大野郡清見村（現：高山市清見町）に畜産研究所を置き、畜産 3 試験場を一元化、飛騨牛研究部、酪農研究部、養豚研究部および養鶏研究部の 4 部体制
平成 18 年	組織改変により総合企画部研究開発課所管へ
平成 23 年	農政部農政課所管へ
平成 26 年	飛騨牛研究部、酪農研究部、養豚・養鶏研究部の 3 部体制
令和 3 年～	養豚養鶏研究部の事務研究機能を関市に集約 再編整備事業により豚舎、鶏舎等の施設を整備中

## (2) 組織



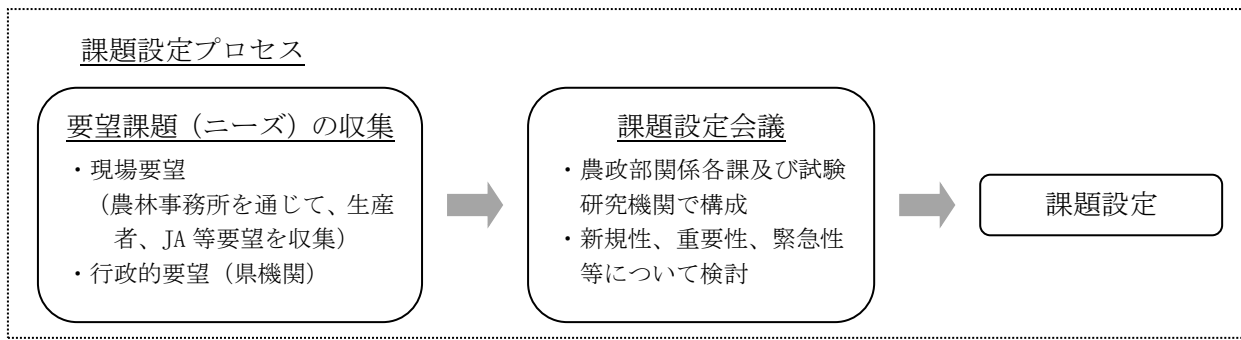
## (3) 圃場面積等

区分	面積 (m <sup>2</sup> )
草地	475, 240
建物その他	401, 571
計	876, 811

## 3 研究課題の設定

### (1) 課題設定までのプロセス

- ・ 生産者、JA 等の現場からの要望及び行政的要望を集約し、県関係機関で構成する課題設定会議において新規性、重要性、緊急性、実現性を検討し、課題を設定している（下図参照）。
- ・ 設定に当たっては、「ぎふ農業・農村基本計画」との整合性を図りながら「畜産研究所研究基本計画」に基づき、研究推進計画に沿った課題の選定を行っている。
- ・ 当研究所は「家畜の育種改良の推進」「畜産新技術の開発」「畜産環境改善」を中心に開発目標として研究課題を構成している。



## (2) 設定課題一覧（資料1）

- ・ 課題は、戦略的に取り組む先行投資的研究課題を「プロジェクト研究課題」、重点研究方針において戦略的視点で実施する課題は「重点研究課題」として位置付けると共に、地域ニーズや迅速かつ柔軟に対応する課題は「地域密着型研究課題」として取り組んでいる。
- ・ 研究費については外部資金を有効に活用し、計画的な試験研究を推進する。  
(外部資金 R1 : 47% → R5 : 33%)

令和1～5年度 分野別課題数等

(予算額単位：千円)

分野	R1年度		R2年度		R3年度		R4年度		R5年度	
	課題数	予算額	課題数	予算額	課題数	予算額	課題数	予算額	課題数	予算額
飛騨牛	9	17,786	8	13,105	8	5,582	6	4,382	6	5,572
酪農	5	6,871	3	6,700	3	4,326	3	4,326	3	4,326
養豚	3	11,894	4	21,139	4	14,819	4	14,529	4	14,459
養鶏	2	1,354	3	3,937	2	3,650	4	3,650	4	3,650
計	19	37,905	18	44,881	17	28,377	17	26,887	17	28,007

## 4 体制

### (1) 所内研究体制（資料2）

- ・ 研究員数は研究所全体としては前回評価時（H26）と変動はないが、各研究部が分散して設置されているため、研究分野ごとにみると1領域1担当者になる場合も増えており、技術の伝承・世代交代がしにくい状況にある。特に、飛騨牛研究部では研究員3人の減となっており、産肉能力検定事業や精液及び受精卵の供給事業等の実施により業務の負担が大きい状況にあるため、課題の見直しなどにより重点化を図ると共に増員の要求を行っている。
- ・ 研究員の年齢構成は前回評価時と比べ、20歳代が2人増加し、40歳代が4人減少する一方で50歳代が2人増加し、中堅職員が少ない状況が続いている。研究歴については、3年未満の職員数に変動は無い（5名）が、3～10年未満の職員が4名増え、10年以上の職員は4名の大幅な減員となっている。全体的な職員数に大幅な変動は無いものの、異動やベテラン職員の退職に伴い、研究経験の浅い研究員が増加している。畜産部門の研究員は家畜の飼養管理に関する基本的な技術の習得が不可欠であると共に、研究内容やそれに伴う手技も高度化してきているため、関連する研修会や講習会などに積極的に参加させ、技術の習得に努めると共に、各研究部においては経験豊富な研究員から若手職員への技術伝承を計画的に行うように努めている。
- ・ 農業技術については、再任用制度を活用して技術の伝承を図るとともに、削蹄師や人工授精師養成講習会に参加させて技術の習得に努めている。また農機安全整備講習に参加させるなど、安全な業務遂行に努めている。

分野別研究員数等

(予算額単位:千円)

年度	分野	研究員数 <sup>※1</sup> ※2	研究員 1 人あたりの		農業技手数 <sup>※2</sup>	業務専門職数
			課題数	予算額		
26 年度 (前年度同時)	飛騨牛	8 (0)	0.9	3,370	5 (0)	5
	酪農	4 (0)	1.5	2,077	5 (0)	5
	養豚	4.5 (0)	1.6	2,347	3 (0)	4
	養鶏	3.5 (0)	1.4	851	2 (0)	6
	計	20 (0)	1.3	2,441	15 (0)	20
R5 年度	飛騨牛	5 (0)	1.2	1,114	5 (0)	8
	酪農	4 (0)	0.8	1,082	6 (1)	6
	養豚	5.5 (0)	0.7	2,629	2 (1)	3
	養鶏	5.5 (1)	0.7	913	2 (0)	4
	計	20 (1)	0.9	1,400	15 (2)	21

※1 研究課題の実務を担当する部長を含む

※2 ( ) 内は任期付きで採用された職員数

### 研究員等年齢構成

年度	区分	30歳未満	30歳以上 ～40歳未満	40歳以上 ～50歳未満	50歳以上
26年度 (前年度)	研究員※	1	6	5	8
	農業技手	3	2	3	7
R5年度	研究員※	3	6	1	10
	農業技手	6	2	3	4

※部長を含む

### 研究・業務従事年数等

年度	区分	従事年数			博士号 取得者数
		3年未満	3年以上 ～10年未満	10年以上	
26年度 (前年度)	研究員※	5	6	9	4
	農業技手	2	1	12	—
R5年度	研究員※	5	10	5	3
	農業技手	1	8	6	—

※部長を含む

### 研究課題財源内訳

(予算額単位：千円)

分野	R1年度		R2年度		R3年度		R4年度		R5年度	
	県費	外資	県費	外資	県費	外資	県費	外資	県費	外資
飛騨牛	5,395	12,391	5,605	7,500	4,382	1,200	4,382	0	4,382	1,190
酪農	4,722	2,149	4,580	2,120	4,326	0	4,326	0	4,326	0
養豚	9,586	2,308	7,126	14,013	6,459	8,360	6,529	8,000	6,459	8,000
養鶏	1,354	0	3,937	0	3,650	0	3,650	0	3,650	0
計	21,057	16,848	21,248	23,633	18,817	9,560	18,887	8,000	18,817	9,190

### 外部機関研修派遣人数 (延べ数)

年度	若手向け研修	中堅向け研修	リーダー向け研修	専門技術習得 ( )内は農業技手のうち数
R1年度	13	16	4	33 ( 13 )
R2年度	5	6	4	15 ( 4 )
R3年度	6	7	7	20 ( 4 )
R4年度	9	8	2	19 ( 2 )
R5年度	3	4	2	9 ( 1 )
計	36	41	19	96 ( 24 )

※R5年度は、8月末現在の数値

(2) 外部機関との連携状況 (資料1)

- 当研究所で取り組んでいる研究をより裾野を広げ質の高い内容とする目的で、国立研究開発法人や大学を中心とした外部研究機関との共同研究を積極的に行っている。このことが競争的資金による研究費の獲得や、最新研究情報の収集、研究員の資質向上に繋がっている。
- 特にDNA育種や受胎率向上及び抗病性に関する高度な手技を要する研究においては、各畜種とも共同研究を中心に行っている。

共同研究件数

年度	件数	体制内訳			
		産学官	産官	学官	官のみ
R1 年度	15	2	1	5	7
R2 年度	12	3	1	4	4
R3 年度	13	1	2	8	2
R4 年度	12	1	1	8	2
R5 年度	12	1	1	8	2
計	64	8	6	33	17

5 研究成果と技術等移転状況

(1) 研究成果 (資料3、4)

- 研究成果については、生産者や関係者対象に畜産研究所研究成果発表会 (ふれあい報告会) を開催したり、試験研究普及カード (※1) によって関係機関や団体に対し発信をしている。
- 飛騨牛研究部における試験研究の集大成である、新規の高能力種雄牛造成については、本期間において8頭が基幹種雄牛 (※2) に選抜された。
- 飼料用米の利用については、酪農、養豚、養鶏での成果を発信している。
- 「精子活性化剤及びその用途」については、令和3年度に特許登録された。
- 「豚のウイルス抵抗性の判別方法、およびその利用」について、共同研究者と共に特許出願を行った。

※1 研究成果を生産現場等で活用する目的で作成し、県関係機関に配布しているもの

※2 産肉能力検定の結果に基づき、岐阜県の改良に必要と認められ、県域で利用する種雄牛

主な研究成果件数

分野	R1 年度	R2 年度	R3 年度	R4 年度	R5 年度
飛騨牛	2	2	1	2	
酪農	2	0	1	1	
養豚	0	0	1	1	
養鶏	1	1	0	0	
計	5	3	3	4	

知的財産権総件数 (R5 年 8 月末現在)

権利	出願中	登録	備考
特許権	1	1	飛騨牛研究部、酪農研究部、養豚養鶏研究部

知的財産権出願等状況

年度	育成者権（品種登録）		特許権	
	出願中	登録	出願中	登録
R1 年度	0	0	0	0
R2 年度	0	0	0	0
R3 年度	0	0	1	1
R4 年度	0	0	0	0
R5 年度	0	0	0	0
計			1	1

※R 5 年度は、8 月末現在の数値

(2) 技術等移転状況（資料 5、6）

- ・種畜ごとの生産者団体に対し、年間を通じ随時各種の研修会等に参加して技術の移転等について丁寧な解説し、生産者の理解を深めるとともに、生産現場での技術の活用が図れるよう指導している。
- ・種雄牛の造成については、各種種雄牛ごとに枝肉研究会を開催し生産者や関係者に枝肉の状況を参観していただくとともに、種雄牛の特徴について説明し交配の指導を実施している。また種雄牛のパフレットを配布し県下生産者に広く情報発信している。
- ・技術的な成果については、関係機関や農業革新支援専門員などと連携し実用化促進に努めている。

研究成果の技術等移転状況 ①主な研究成果（R 1～5 年度 8 月末）

分野	成果名	技術移転状況
飛騨牛	「広茂清」号基幹種雄牛に選抜	R1～5, 622 本配布（毎年度全体の 5～16%のシェア）
	「白安原」号基幹種雄牛に選抜	R1～67 本配布（毎年度全体の約 1%のシェア）
	「安俊晴」号基幹種雄牛に選抜	R1～6, 447 本配布（毎年度全体の 5～12%のシェア）
	「吉良李」号基幹種雄牛に選抜	R1～549 本配布（毎年度全体の約 2%のシェア）
	「茂勝真」号基幹種雄牛に選抜	R1～1, 271 本配布（毎年度全体の約 3%のシェア）
	「柊富士」号基幹種雄牛に選抜	R1～141 本配布（毎年度全体の約 1%のシェア）
	「花清 5 7 0 の 8」号基幹種雄牛に選抜	R1～2, 362 本配布（毎年度全体の約 4%のシェア）
	「永虎久」号基幹種雄牛に選抜	R1～452 本配布（毎年度全体の約 1%のシェア）
酪農	乳牛の初-2 産間での乾乳期短縮技術による繁殖性改善効果	研修会等において情報提供を実施
	県内で生産される飼料用米の品種別成分表について	飼料用米の栽培面積 3712ha (R4) (対前年比 123%)
	県内で流通する稲ワラ中のβカロテン含量	県内農家のβカロテン分析を 109 点実施 (R4)
	乳汁中脂肪酸組成に影響を及ぼす諸要因の解明および脂肪酸組成とケトースとの関係	乳汁中脂肪酸組成の測定を支援し東海酪連において R4. 7 月から県内農家のバルク乳の成分測定を開始

養豚	豚サーコウイルス2型による死亡に影響を与える遺伝子マーカー	デュロック種豚「ポーノブラウン」を本マーカーで選抜し、抗病性を付与
	デュロック種豚「ポーノブラウン」の人工授精用精液販売開始	R5年2月より供給再開 (H4年度、4戸へ176本)
養鶏	奥美濃古地鶏の開放雌雄混合飼育鶏舎における飼料用米(モミ米)給与実証効果	飼料高騰の背景もあり、奥美濃古地鶏肥育農家の全戸で、飼料用米が利用されている。
	産卵期に飼料添加物を使わない採卵鶏の飼料用米(モミ米)給与技術	農家を対象とした「ふれあい報告会」や、畜産研通信(HP)で成果紹介(H3, H4)

研究成果の技術等移転状況 ②精液・種畜の供給、依頼検査

年度	分野	技術・製品の概要	技術移転の状況
R1年度	飛驒牛	種雄牛「広茂清」「白安原」が基幹種雄牛に選抜、優良凍結精液の販売	種雄牛凍結精液配布 : 16,429本
		優良和牛子牛譲渡	72頭(雌35頭、去勢37頭)
	酪農	畜産研究所高能力乳牛の雌受精卵供給	66卵
		高能力乳用牛雌子牛の供給	16頭(東濃牧場)
		飼料の成分分析	一般239件、βカテン69件
	養豚	※豚熱により種豚全頭殺処分(H30年12月)	再造成開始
養鶏	特定JAS対応型奥美濃古地鶏素ひな出荷	116,639羽	
R2年度	飛驒牛	種雄牛「安俊晴」「吉良李」が基幹種雄牛に選抜、優良凍結精液の販売	種雄牛凍結精液配布 : 16,294本
		優良和牛子牛譲渡	67頭(雌24頭、去勢43頭)
	酪農	畜産研究所高能力乳牛の雌受精卵供給	7頭(東濃牧場)
		飼料の成分分析	一般397件、βカテン245件
	養豚	—	再造成中
養鶏	特定JAS対応型奥美濃古地鶏素ひな出荷	106,783羽	
R3年度	飛驒牛	種雄牛「茂勝真」が基幹種雄牛に選抜、優良凍結精液の販売	種雄牛凍結精液配布 : 16,877本
		優良和牛子牛譲渡	67頭(雌32頭、去勢35頭)
	酪農	畜産研究所高能力乳牛の雌受精卵供給	34卵
		高能力乳用牛雌子牛の供給	6頭(東濃牧場)
		飼料の成分分析	一般263件、βカテン93件
養豚	—	再造成中	
養鶏	特定JAS対応型奥美濃古地鶏素ひな出荷	96,780羽	
R4年度	飛驒牛	種雄牛「柗富士」が基幹種雄牛に選抜、優良凍結精液の販売	種雄牛凍結精液配布 : 16,899本
		優良和牛子牛譲渡	62頭(雌20頭、去勢42頭)
	酪農	畜産研究所高能力乳牛の雌受精卵供給	66卵
		高能力乳用牛雌子牛の供給	4頭(東濃牧場)
		飼料の成分分析	一般248件、βカテン109件
養豚	デュロック種種豚「ポーノブラウン」精液譲渡(R5年2月再開)	精液176ドーズ	
養鶏	特定JAS対応型奥美濃古地鶏素ひな出荷	92,232羽	
5年度 (8月末)	飛驒牛	種雄牛「花清570の8」「永虎久」が基幹種雄牛に選抜、優良凍結精液の販売	種雄牛凍結精液配布 : 7,392本
		優良和牛子牛譲渡	28頭(雌12頭、去勢16頭)



	酪農	畜産研究所高能力乳牛の雌受精卵供給	37卵
		高能力乳用牛雌子牛の供給	4頭（東濃牧場）
		飼料の成分分析	一般 26件、βカテン 22件
	養豚	デュロック種種豚「ポーノブラウン」 精液譲渡	精液 629 ドーズ(8/18 現在)
養鶏	特定 J A S 対応型奥美濃古地鶏素ひな出荷	(未集計)	

研究機関が開発した技術等に関する講習等実績

※ ( ) 内は研究所主催うち数

年度	件数	内容
R1 年度	21 (4)	枝肉研究会、ゲノム育種価研修会、飛騨牛改良協議会、飼料分析促進会議、岐阜県酪連ブロック会議、酪農スキルアップセミナー、卵用奥美濃古地鶏飼養管理技術講習会 他
R2 年度	11 (7)	枝肉研究会、ふれあい報告会、飼料分析促進会議、受精卵移植関連新技術全国会議、卵用奥美濃古地鶏飼養管理技術講習会 他
R3 年度	13 (4)	枝肉研究会、中濃地域肉用牛改良協議会、酪農スキルアップセミナー、卵用奥美濃古地鶏飼養管理技術講習会 他
R4 年度	30 (4)	枝肉研究会、飛騨地域肉用牛改良協議会、岐阜県農業教育研究会、岐阜県酪連ブロック会議、家畜人工授精師技術研修会、飛騨養豚協議会研修会 他
R5 年度	13 (3)	中濃地域肉用牛改良協議会、和牛の飼料利用性評価指標検討会、飼料設計に関する研修会、飼料分析促進会議、卵用奥美濃古地鶏飼養管理技術講習会 他
計	88 (20)	

※R 5 年度は、8 月末現在の数値

研究成果の情報発信件数

年度	研究報告	学会誌	学会発表・講演	報道発表等
R1 年度	16	0	6	1
R2 年度	15	1	10	2
R3 年度	15	3	4	—
R4 年度	14	1	9	14
R5 年度	—	1	—	—
計	60	6	29	17

※R 5 年度は、8 月末現在の数値。研究報告は研究所発行のもの。

## 6 技術等支援（資料7）

- ・年間700件を超える技術支援や指導などを行っている。当所の特徴は、研究員が実際に現地（農家、子牛市場、食肉センター等）に直接赴いた際に、家畜の育種改良や繁殖技術、飼養管理技術等の相談を受けることが多く、出向いた研究員が適切に回答、指導を行っている。また、令和3年度、4年度は第12回全国和牛能力共進会出品に向けての技術支援が増加した。
- ・視察受け入れについては、防疫上の理由により養豚・養鶏分野では実施していない。飛騨牛については防疫対応に十分考慮し、原則として県内の関係者に限り、畜産研究所の防疫方針に基づいて実施している。各地域の肉用牛改良協議会や和牛改良組合などの生産者団体を中心に年間10件程度受け入れている。
- ・各家畜や枝肉、自給飼料の共進会の審査を年間40件程度実施しており、その折に育種改良や飼養管理、自給飼料の栽培調製などについての技術指導を併せて実施している。
- ・牛の家畜人工授精師や受精卵移植師の養成講習会の講師を務め、特に飛騨牛研究部においては実習講義を受け持ち、技術員の養成に尽力している。
- ・大学生のインターンシップや新規就農者の技術習得、高校生や大学生の産業現場研修や岐阜大学の家畜臨床繁殖学実習などに対応し、次代の農業者や技術者の育成に努めている。

### 指導・相談件数

年度	件数	内訳		内容
		現地対応	来所・電話等	
R1年度	757	481	276	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全家畜：飼養管理技術、飼料給与、育種改良、経営診断、枝肉審査</li> <li>・飛騨牛：繁殖管理技術、牛肉のおいしさ、脂肪の質解析、全国和牛能力共進会技術支援、共進会等審査、ゲノム育種</li> <li>・酪農：受精卵移植関連技術、飼料給与診断、自給飼料栽培・調製・給与指導、雑草防除</li> <li>・養豚：種豚・精液導入、肉質改善、人工授精技術、畜産環境（堆肥化技術、脱臭技術）</li> <li>・養鶏：環境・疾病・経営関係の相談</li> </ul>
R2年度	816	528	288	
R3年度	780	516	264	
R4年度	876	552	324	
R5年度	328	210	118	
計	3,557	2,287	1,270	

※R5年度は、8月末現在の数値

### 視察受け入れ等件数

年度	視察受け入れ	講師・審査員等	研修生受け入れ	教育支援
R1年度	2	69	2	15
R2年度	2	57	3	2
R3年度	6	54	2	4
R4年度	11	66	3	5
R5年度	2	26	1	5
計	23	272	11	31

※R5年度は、8月末現在の数値

## 7 前回の外部評価結果とその後の対応

指摘事項	対応状況
<p><b>研究課題の設定</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・予想される研究成果の有効性についての検証</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・研究課題の設定については、農政部研究課題設定会議での検討を通じ実施している。また、研究員が意見交換会や各種研究会の開催および各種会議や研修会へ積極的に参加することにより、生産や流通の現場からの意見や要望など幅広い情報の収集を行うと共に、農家と直接接する農業革新支援専門員等との連携の強化により、多様な研究ニーズの把握に努めるとともに、成果の有効性を確認しながら進めている。</li> </ul>
<p><b>研究の推進及び研究体制</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・多くの研究が外部資金に委ねられる傾向がある中、県内農家ニーズに十分応えられるよう、一層対応に工夫されることを期待する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・外部資金を活用した共同研究については、当所で取り組んでいる研究をより裾野を広げ、質の高い内容とする目的で積極的に取り組んでいるが、研究の実施に当たっては、県内農家ニーズを常に意識しながら実施している。また、研究部が3箇所に分散していることや、研究員の人数が限られていることから、今後とも課題の重点化を図り効率的に研究を推進することで、県内農家のニーズに応えたい。</li> </ul>
<p><b>成果の発信と実用化促進</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・研究活動の出口として「ブランドの発展・振興」が謳われているが、ブランド化、生産物消費、地産地消、海外進出、農業の担い手確保などは、相互に密接に関連した問題であり、これらをうまく連動させる新しい戦略が必要なのではないか。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「ブランドの発展・振興」において、ブランド化、生産物消費、地産地消、海外進出、農業の担い手確保などは相互に密接に関連していると考ええる。これらとうまく連動するために、畜産研究所は関係機関と緊密に連携を取りながら試験研究を進め、研究成果の実用化促進に努めている。併せて各種畜産団体の会合等や研修会の場に積極的に出向いて情報発信に努めているが、より効果的に成果が発信できるように引き続き関係団体や行政等の指導機関等と連携を密にして取り組んでいきたい。</li> </ul>
<p><b>技術支援</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・技術指導や相談は、その対応も含め評価する。技術講演会もコンスタントに開催されているが、開催の周知方法や内容にも一層工夫され、より多くの県内農家への的確な技術移転、現場の喫緊の課題解決、販売促進につながることを期待する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・技術支援の件数は、例年同様の件数で推移している。効率的に研究推進や技術支援を行うために、課題の整理と重点化を進めるとともに、農業革新支援専門員と連携して、より適切な畜産技術支援が行えるように今後とも取り組んでいく。</li> <li>・また、畜産研究所が主催する研究成果発表会については、開催の周知方法や発表内容、現場に即した講師の招へい等について工夫し、より多くの生産者や関係機関に参加していただけるよう努めている。</li> </ul>
<p><b>人材の育成</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・研究員定員の削減はやむを得ない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・畜産研究所は各研究部が分散して設置されているので、研究</li> </ul>

が、世代交代には常に配慮が必要と思われる。畜産部門の研究員は基本的な技術の取得が、研究課題の遂行、農家への技術移転には不可欠であり、常にある間隔を持って若手研究者の補充を図っていく必要がある。

分野ごとにみると1領域1担当者になる場合も増えており、技術の伝承・世代交代がしにくい状況にある。しかし、各研究課題を複数の研究員で取り組み、特にDNA解析技術、受精卵移植技術等の技術の若手職員への伝承を常に心がけ、スムーズに世代交代が行えるよう努めている。また、家畜の審査講習会や、中央畜産技術研修会などに積極的に参加させ、技術や知識を身に付けられるよう取り組んでいる。